

思いやりを育む養育環境に関する研究

Research on Nurturing Prosocial Behavior in Children: An Analysis of Rearing Factors

小林 美佐子 (Misako Kobayashi) 指導：青柳 肇

1. 序論

増え続ける児童虐待や育児放棄、いじめの原因はさまざまあるが、思いやりの不足が原因の一つだと考えられる。少子化や核家族化、女性の社会進出など住環境やライフスタイルの変化に伴い、教育や養育環境づくりに不安を覚える母親も多い。親と子の視点から、思いやりを育む養育環境について検討した。

2. 思いやり測定尺度の作成

目的 本調査は世代を問わず思いやりを測る尺度を作成し、思いやりに関する一般の傾向を把握することを目的とした。

方法 思いやりについて26項目、向社会的行動尺度(菊池, 1988)からの5問で質問紙調査を行った。首都圏私立大学3校の大学生、大学生の保護者、首都圏2幼稚園の保護者に2010年に調査を実施し、有効回答438名を得た。

結果と考察 因子分析の結果、3因子(「他者への配慮にもとづく行動力」「自信からくる心の豊かさ」「状況判断にもとづく他者への配慮」)を抽出し、思いやり測定尺度とした。因子得点の因子間相関を調べた。さらに菊池(1988)の尺度の5項目と、本研究で抽出した3因子それぞれとも相関がみられたため、作成した尺度は妥当性があるとみなした。男性より女性、学生より社会の方が、思いやりが高いことが示された。また年齢が上がるほど思いやりが上がることを示された。思いやられる経験が思いやりを高める要因となると考えた。

3. 思いやりの親子間伝達の検討

目的 親が行っている思いやりの教育は、親が考えているように子どもに伝わっているか。どのような方法をとれば、親の思いやりの教育が子どもに伝わるか検討することを目的とした。

方法 首都圏大学3校の学生51名とその保護者に思いやり測定尺度と親子対比項目6項目と大学生に4項目で質問紙調査を行った。2011年7月から11月に調査を実施した。

結果と考察 思いやりの高い親の子どもは思いやりが高く、低い親の子どもは低い傾向が示された。思いやりの教育の頻度、方法(言葉、言葉と行動、行動、特別教えていない)、態度(ほめた、説明した、叱った、叩いて怒った)に関し

て、親子間での認識の違いは有意となった。子どもは親が実践するだけよりも、言葉で伝える方法の方が理解しやすい。子どもは思いやりのある行動をとった時にほめられることで思いやりの教育を受け入れ、思いやりが向上する。親子に信頼関係があれば、叱る方法も思いやりを向上させる。しかし叩いて怒る方法は思いやり逆効果であることが示された。

4. 思いやりを育む養育環境と思いやり教育の連鎖の検討

目的 思いやりは養育環境の影響を受けるのか、思いやりの教育は連鎖するのか検討することを目的とした。

方法 首都圏2幼稚園の保護者123名に思いやり測定尺度と親子対比項目の大学生と同じ10項目に回答。現在の思いやり教育に関する5項目で調査した。調査は2011年7月～11月に実施した。

結果と考察 親になり、子育てをする時に、自分がされた教育方法を受け入れていた場合には、同様の教育を行い、同じような養育環境を整える傾向が示された。叩いて教えられた場合のみ、叩いて教えない傾向が表われた。養育環境については、ペット、弟妹、祖父母、近隣もその存在だけでは思いやりにはつながらない。親が言葉がけをし、思いやることを伝えることで、人間関係やペットの存在も、思いやりにつながるのだと考えられる。

5. 総合考察

親の思いやりが高いと、子どもの思いやりも高いことが示された。親が思いやりのある言動を実践し、子どもにも思いやりを持って接することで、子どもの思いやりを高める要因となることが明らかになった。親がされた教育や養育環境を子どもにも与える傾向が示されたことから、親が思いやりの意識を高くもつことが、思いやりの教育が良い連鎖となって伝わっていくのだと言える。

6. 結論

親は自分が経験した思いやりの教育や養育環境を子どもにも与え、行う傾向が表われたが、親の意識次第で虐待の連鎖を止めることができる可能性も見えた。さらに思いやり教育の環境的要因を増やし検討を進めること、データの量を増やすことが今後の課題である。